

コロナ禍を 乗り切る

いま世界中を覆っているコロナ禍は、精神障害のある人にはより過酷です。これを乗り切るためには連帯が必要であり、身近なところにある手段を使おうというイタリアのメッセージを届けていただきました。



おおくま かずお
大熊 一夫 ジャーナリスト

トリエステからテレフォン精神保健のすすめ

新型コロナウイルスによって1日に何百人もが亡くなるイタリア……「あゝ、イタリア地域精神保健は大丈夫だろうか」と気をもんでいたら、トリエステのロベルト・メッツイーナ（昨年秋までトリエステ精神保健局長、WHOトリエステ協働センター長/写真）から悲痛なメッセージが流れてきました。



「ウイルス危機はすべてを後に追いやり、我々の生活に制約を加え、暮らしを一変させた。いま神の幼き娘である精神保健は比類なき惨状を呈し、沈黙したままもだえ苦しんでいる」

Abbraccioはダメ！

イタリア精神保健の世界では、^{アブラッチョ}Abbraccioつまり「抱擁」は日本人には想像もつかない意味深い大切な行為です。トリエステを訪れると、クライシスの患者と職員のコミュニケーションの手段として必ず話題になります。

「人間関係の構築はセラピーや精神医療の要だが、コロナ時代の今は『互いの距離を保つこと』と忠告され、はてはAbbraccioという病人の深刻な苦悶を解き放ってくれる行為も禁忌とされてしまった。個人的な支えあいや公共の助け合いサービスは協同組合や非営利団体が提供してきたのだが、それらは、感染予防措置が不十分との理由で停止に追い込まれている。なかでも24時間支援体制の住居では爆発的感染が起こり、精神保健センターやデイセンターの治療的、リハビリ的価値は大ピンチだ」

社会的孤立をどう防ぐか

日本のような単科の精神病院はイタリアではほぼゼロで、精神疾患の人々も自宅暮らしが当たり前です

が、未曾有のウイルス禍で「自宅隔離」になってしまった。このあおりを強く受けたのは、精神保健センターや職場や工場などに出かけて行くことができなくなった人たちです。俄かな孤立状態で、自分を守れない人、守る方法を知らない人、知ろうとしない人が、社会から取り残されてしまったのです。

こんな社会的に不利な立場の人々の精神の健康を救う手立てとして何ができるかとロベルトは考えて、「電話を有効利用しよう」とメッセージの中で提案したのです。

「電話は固定でも携帯でもいい。必要とあれば薬などのサービスを提供してくれるような心配りの効いた店がいつも開かれているなら、最高のリスク抑制となる。幻覚・妄想や身体症状を持つ患者、ひどいトラウマ既往症の人などは、より頻繁に接触することで、深刻な病状悪化や入院を防ぐことができる。今はさておき、個々人の話や状況を受け止めるテレワークの手法、つまりテレ・メディスン、テレ・精神保健、リモート・テレ・ハートの手法を作り上げるべきだ。そしてサービスにたどり着けない人へのサービスの出前も絶対に必須だ。そのために、コミュニティ、隣近所、教会、××協会など、考えうる全資源を動かそうではないか」

今こそ、「連帯」に裏打ちされた文化的社会的精神保健サービスを築こう、とロベルトは呼びかけます。ウイルス感染はいつしか終息するでしょう。そのあとに精神保健の本格的な出番が必ずくる、とWHOも最新の「指針」で述べています。

【5月1日17時現在のイタリア】

感染者：207,428人（死者と回復者含む）
入院：17,569人（うち集中治療室：1,578人）
自宅隔離療養者：81,796人（入院せず重症化して亡くなった人が多い）
死者累計（4月29日）：28,236人（うち医師：153人）
回復者累計：78,249人